

令和4年度全国学力・学習状況調査結果の分析

豊後大野市教育委員会

市としての目標値・・・・・・・・平均正答率で全国平均を上回る

【結果の概要】

《小学校》

全国学力・学習状況調査においては、算数・理科において目標値である全国平均正答率を上回った。国語においても、ほぼ全国値と同等である。
授業改善が進み、問題解決的な学習展開も進みつつあると考えられる。

《中学校》

全ての教科において、全国平均値を上回ることができなかったが、ほぼ全国値と同等である。
数学科においては、年々全国値との差が少なくなり、授業改善は進んでいると考えられる。

《同一児童生徒》

中学校において、全ての教科において力を伸ばしきれていない状況がうかがえる。
学年集団の持つ課題の明確化が必要である。

《新大分スタンダードに関して》

問題解決的な展開の授業が取り込まれるようになってきている。
自分の考えを述べたり、話し合ったりする場の設定など、「思考力・判断力・表現力」を身につけるような意識や工夫がされるようになってきている。
授業改善が進みつつあるが、さらなる徹底が必要である。

【各教科の概要】

《小学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

国語	観点	市正答率	全国正答率
	話すこと・聞くこと	64.5	66.2
	書くこと	46.7	48.5
	読むこと	62.5	66.6
	言葉の特徴や使い方に関する事項	71.4	69.0
	我が国の言語文化に関する事項	86.8	77.9

正答率が全国平均を下回っている問題 (8 / 14)

- ・話し言葉と書き言葉との違いを理解する
- ・言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることを捉える
- ・必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの内容を捉える
- ・互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、自分の考えをまとめる
- ・登場人物の相互関係について、描写を基に捉える
- ・人物像や物語の全体像を具体的に想像する
- ・表現の効果を考える
- ・文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整える

《小学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

算数	観点	市正答率	全国正答率
	数と計算	71.0	69.8
	図形	64.1	64.0
	測定		
	変化と関係	50.5	51.3
	データの活用	71.5	68.7

正答率が全国平均を下回っている問題 (6 / 16)

- ・示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察できる
- ・示された場面のように、数量が変わっても割合は変わらないことを理解している
- ・伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、未知の数量の求め方と答えを記述できる
- ・正三角形の意味や性質を基に、回転の大きさとしての角の大きさに着目し、正三角形の構成の仕方について考察し、記述できる
- ・図形を構成する要素に着目して、長方形の意味や性質、構成の仕方について理解している
- ・図形を構成する要素に着目して、ひし形の意味や性質、構成の仕方について理解している

《小学校》

観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

理科

観点	市正答率	全国正答率
エネルギー	53.3	51.6
粒子	62.4	60.4
生命	72.4	75.0
地球	66.1	64.6

正答率が全国平均を下回っている問題（11 / 17）

- ・問題を解決するために必要な観察の視点を基に、問題を解決するまでの道筋を構想し、自分の考えをもつことができる
- ・自分で行った観察で収集した情報と追加された情報を基に、問題に対するまとめを検討して、改善し、自分の考えをもち、その内容を記述できる
- ・昆虫の体のつくりを理解している
- ・提示された情報を、複数の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる
- ・観察などで得た結果を、他者の気づきの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる
- ・メスシリンダーの正しい扱い方を身に付けている
- ・自分で発想した予想と、実験の結果を基に、問題に対するまとめを検討して、改善し、自分の考えをもつことができる
- ・自然の事物・現象から得た情報を、他者の気づきの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述できる
- ・問題に対するまとめを導きだすことができるように、実験の過程や得られた結果を適切に記録している
- ・観察で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる
- ・観察などで得た結果を、結果からいえることの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる

《中学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

国語

観点	市正答率	全国正答率
話すこと・聞くこと	60.3	63.9
書くこと	50.8	46.5
読むこと	67.6	67.9
言葉の特徴や使い方に関する事項	71.8	72.2
情報の扱い方に関する事項	50.8	46.5
我が国の言語文化に関する事項	68.5	70.2

正答率が全国平均を下回っている問題 (7 / 14)

- ・聞き手の興味・関心などを考慮して、表現を工夫する
- ・論理の展開などに注意して聞く
- ・自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話す
- ・助動詞の働きについて理解し、目的に応じて使う
- ・表現の技法について理解する
- ・場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基に捉える
- ・行書の特徴を理解する

《中学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

数学

観点	市正答率	全国正答率
数と式	59.4	57.4
図形	39.4	43.6
関数	36.9	43.6
データの活用	55.4	57.1

正答率が全国平均を下回っている問題 (12 / 14)

- ・簡単な連立二元一次方程式を解くことができる
- ・一次関数の変化の割合の意味を理解している
- ・多数の観察や多数回の試行によって得られる確率の意味を理解している
- ・問題場面における考察の対象を明確に捉えることができる
- ・目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができる
- ・結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見だし、説明することができる
- ・データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる
- ・箱ひげ図から分布の特徴を読み取ることができる
- ・与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることができる

- ・事象を数学的に解釈し，問題解決の方法を数学的に説明することができる
- ・証明の根拠として用いられている三角形の合同条件を理解している
- ・筋道を立てて考え，事柄が成り立つ理由を説明することができる

《中学校》 観点ごとの全国平均正答率と市平均正答率

理科	観点	市正答率	全国正答率
	エネルギー	38.6	41.9
	粒子	50.6	50.9
	生命	57.1	57.9
	地球	44.9	44.3

正答率が全国平均を下回っている問題 (12 / 21)

- ・日常生活や社会の中で物体が静電気を帯びる現象を問うことで，静電気に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる
- ・モデルを使った実験において，変える条件と変えない条件を制御した実験を計画できるかどうかをみる
- ・継続的に記録した空の様子を撮影した画像と百葉箱の観測データを天気図に関連付けて，天気の変化を分析して解釈できるかどうかをみる
- ・化学変化に関する知識及び技能と「エネルギー」を柱とする領域の知識及び技能を関連付け，水素を燃料として使うしくみの例の全体を働かせるおおもとして必要なものを分析して解釈できるかどうかをみる
- ・複数の脊椎動物の外部形態の考察を行う場面において，あしの骨格について共通性と多様性を見方を働かせながら比較し，共通点と相違点を分析して解釈できるかどうかをみる
- ・考察の妥当性を高めるために，測定値の増やし方について，測定する範囲と刻み幅の視点から実験の計画を検討して改善できるかどうかをみる
- ・過去の大地の変動について，垂直方向の移動だけで推論した他者の考察を，水平方向の移動も踏まえて，検討して改善できるかどうかをみる
- ・地層の広がり方について，時間的・空間的な見方を働かせながら，ルートマップと露頭のスケッチを関連付け，地層の傾きを分析して解釈できるかどうかをみる
- ・液体が気体に変化することによって温度が下がる身近な事象を問うことで，状態変化に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる
- ・アリの行列の作り方を探究する場面において，視覚による情報を基に行列をつくるかを調べた実験の結果を分析して解釈し，課題に正対した考察を行うことができるかどうかをみる
- ・予想や仮説と異なる結果が出る場合について，結果の意味を考え，観察，実験の操作や条件の制御などの探究の方法について検討し，探究の過程の見通しをもつことができるかどうかをみる
- ・未知の節足動物とアリの外部形態を比較して共通点と相違点を捉え，分類の観点や基準を基に分析して解釈できるかどうかをみる

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果の分析

豊後大野市教育委員会

1. 2022年度の総括（学力調査結果）

（1）小学校

対象人数 小学6年生 242名

結果

ア．目標 平均正答率 全国平均以上 算数・理科（クリア）

・目標をほぼ達成した。

イ．県平均との比較 算数・国語については同率

・県平均を上回ることが望ましい。

（2）中学校

対象人数 中学3年生（9年生） 242名

結果

ア．目標 平均正答率 全国平均以上 なし

・2021年度は国語のみ全国平均以上であった。

イ．県平均との比較 国語、数学、理科全て下回る

・県平均を上回ることが望ましい。

（3）全体的総括

小学校において、点数学力については一定の成果が見られ学力の維持がなされている。

中学校では、国語、数学、理科全ての点数アップにつながる指導内容や理解力の向上について見直す必要がある。

2. 今後の取組について

(1) 確かな学力の育成について

2022年度の学力向上の方針は、以下の点を重点に取り組んでいる。

- ・ 学びに向かう集団づくり
- ・ 思考力・判断力・表現力
- ・ 生きて働く知識・技能

学びに向かう集団づくり

学級集団（学年集団）で学ぶ環境ができているか、今後点検する必要がある。
4月以降を振り返り、2学期に向けて具体的な取組内容を提示する。

- ア．朝の会の姿を統一する。
- イ．発表の仕方やグループ学習のあり方等、授業中の過ごし方について見直す。
- ウ．学びに向かう姿を可視化し、児童生徒に取り組ませる。

思考力・判断力・表現力

生活力の基礎となる「思考力・判断力・表現力」が不足していることは、今回の調査についての「活用」の結果で明らかである。活用力の低さは、10年間の課題であり、なかなかクリアできない状況である。

- ア．日常生活の知識と体験活動の知識、そして学習内容の知識を活用し、課題解決を図っていく。そのような思考回路の多面化（多角化）が習慣化できるよう、意図的に学習の中に仕組む。

- (例)
- | | | | |
|-------|---------|---|---|
| 1) 理科 | 木の陰 | 太陽の方角
太陽の動き
立っている方向
時刻 | 太陽が東から西へ動く
陰の長さによる太陽の位置
太陽の反対側に陰ができる
1日の時間 |
| 2) 社会 | 大仏 | 為政者の視点
民衆の視点 | |
| 3) 道徳 | スリッパの整頓 | 先生から怒られるから
先生から褒められるから
決まりだから
次の人が使いやすいから
そろえると自分が気持ちいいから | |

このようなことを、1つの結果から常に意識をさせる。

イ．自分の考えを相手に伝える場面を多く経験させる。そのため、グループ学習でプレゼンを多く取り入れ、ディベート学習を用い、自己主張をさせる。また、発言の根拠を明確にする習慣を、すべての教科で身につけさせる。

ウ．夢の実現に向け、主体的に自己実現を図るためには、最低限の点数学力が必要である。そのため、低学力層に対する個別指導の強化が必要である。

低学力層の割合（正答率30%以下）

小学校国語	9.6%	中学校国語	6.7%
小学校算数	4.9%	中学校数学	25.9%
小学校理科	11.2%	中学校理科	18.6%

高学力層の割合（正答率80%以上）

小学校国語	24.7%	中学校国語	28.1%
小学校算数	27.5%	中学校数学	11.5%
小学校理科	28.3%	中学校理科	4.8%

2学期の重点課題として位置づけ、すべての子どもにとって楽しい学校となるよう取り組む。

3. 学校質問紙より肯定的な意見（全国、県以上のものに着色）

	小学6年生	中学3年生（9年）
人が困っているときは、進んで助けていますか	90.4% （全国 88.9、県 88.4）	86.1% （全国 88.4、県 88.4）
友達と協力するのは楽しいと思いますか	94.6% （全国 94.0、県 93.3）	95.1% （全国 93.7、県 94.3）
自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか	95.1% （全国 93.7、県 94.3）	76.8% （全国 76.9、県 79.5）
先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか	74.7% （全国 73.5、県 74.0）	86.2% （全国 86.6、県 87.7）
朝食は毎日食べていますか。	92.6% （全国 94.4、県 93.9）	93.5% （全国 91.9、県 92.9）

小学校において、児童同士、対教師との関係は非常に良好であり、信頼関係が築かれている様子がうかがえる。しかし、中学校においては生徒同士、対教師との人間関係については、全国、県と比べて低い傾向にある。学級の中で自分の意見を述べたりする際に、クラスの友だちの反応が不安になり、意見を言いにくい状況があると予想できる。

今後は、「人間関係づくりプログラム」などのソーシャルスキルトレーニングを通して、より自己表現できる環境づくりに取り組む必要がある。

また、日常的な「人権教育」を仕組み、個人の「人権感覚」を磨いていくことが重要である。

【 豊後大野市 】

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（児童・生徒質問紙）

1 調査結果の概要

児童質問紙

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」との問いに対して、本市では82.5%と、県平均（78.3%）全国平均（77.3%）よりも肯定的に回答した児童が多い。
- ・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」との問いに対して、本市では、83.8%と、県平均（78.5%）全国平均（80.1%）よりも肯定的に回答した児童が多い。
- ・「学級の友達と意見を交換する場面で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか」との問いに対して、本市では、32.8%と、県平均（21.0%）全国平均（22.5%）よりも肯定的に回答した児童が多い。

生徒質問紙

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」との問いに対して、本市では78.9%と、県平均（78.6%）全国平均（79.2%）とほぼ同等であった。
- ・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」との問いに対して、本市では、81.7%と、県平均（77.9%）全国平均（78.7%）よりも肯定的に回答した生徒が多い。
- ・「学級の友達と意見を交換する場面で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか」との問いに対して、本市では、18.3%と、県平均（18.1%）全国平均（17.8%）よりも肯定的に回答した生徒が多い。

2 豊後大野市の児童・生徒質問紙の調査結果をふまえて

本市では、主体的・対話的で深い学びについて、「学びに向かう集団づくり」が重要であると考え、以下の点を中心に継続して取り組むことにする。

発表の仕方やグループ学習のあり方等、授業中の過ごし方について見直す。

学びに向かう姿を可視化し、児童生徒に取り組ませる。

日常生活の知識と体験活動の知識、そして学習内容の知識を活用し、課題解決を図っていく。そのような思考回路の多面化（多角化）が習慣化できるよう、意図的に学習の中に仕組む。

自分の考えを相手に伝える場面を多く経験させる。そのため、グループ学習でプレゼンを多く取り入れ、ディベート学習を用い、自己主張をさせる。また、発言の根拠を明確にする習慣を、すべての教科で身につけさせる。

【 豊後大野市 】

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（学校質問紙）

1 調査結果の概要

小学校：学校質問紙

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」との問いに対して、本市では90.9%{県平均(88.9%)全国平均(87.2%)}と肯定的に回答した学校が多い。
- ・「学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」との問いに対して、本市では90.9%{県平均(83.2%)全国平均(80.9%)}と肯定的に回答した学校が多い。
- ・「児童同士がやりとりする場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか」と回答した学校は、本市では63.7%{県平均(28.7%)全国平均(31.3%)}がほぼ毎日、週3回以上使用している。

中学校：学校質問紙

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」との問いに対して、本市では100%{県平均(89.1%)全国平均(87.9%)}と肯定的に回答した学校が多い。
- ・「学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」との問いに対して、本市では100%{県平均(89.1%)全国平均(86.2%)}と肯定的に回答した学校が多い。
- ・「児童同士がやりとりする場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか」と回答した学校は、本市では85.7%{県平均(78.2%)全国平均(81.2%)}と肯定的に回答した学校が多い。

2 豊後大野市の学校質問紙調査の結果をふまえて

課題解決学習については、小学校・中学校ともに全国平均以上(100%)の高い数値であった。また、話し合い活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることに対しても、小学校、中学校ともに全国平均を上回っていた(100%)。今後も、課題解決学習を工夫(思考回路の多面化(多角化)が習慣化できるよう、意図的に学習の中に仕組む)し、さらに自分の考えを深める機会の保障が必要である。

今年度、一人1台タブレットを配布したことにより、自分の考えを積極的に表現したり、友だち同士で調べあったりする学習を効果的に行えるようになった。今後は、より教科の本質に迫り主体的・対話的で深い学びを促すために、ICTを活用した授業の工夫を行う必要である。